



名古屋大学大学院創薬科学研究科特任教授

福山 透

【略歴】

1948年 安城市生まれ

1971年 名古屋大学農学部卒業

1977年 ハーバード大学化学科 Ph.D. 取得

1988年 ライス大学教授

1995年 東京大学薬学部教授

2013年 東京大学名誉教授

2013年より現職

## 「若き日の出会い」

どんなに才能豊かな人間であろうと、文化の無いところで育てばただの野蛮人として一生を終えるだろう。私達は良かれ悪かれ、様々な人間に出会うことによって成長することが出来る。私の専門は有機化学、その中でも天然物合成化学であるが、過去にどのような方々との出会いがあって現在の私が形成されたかを書くのは、ひょっとすれば若手研究者の参考になるかも知れない。

親父は画家だったが、私に画才がないことは幼い頃から自覚していた。ただ、キャンバスに向かって真剣に絵を描く親父には畏怖の念を抱きつつも、描き終わった絵にサインするのを見て、「格好良いなー」と尊敬していたのも事実である。特にこれと言って将来何になりたいということも考えずにいた中学生の頃、化学の実験中に担当の深津周一先生に何度か褒められたことがあった。化学の才能があるかも知れない、と自惚れでも思ったことが私の原点となった。一方、高校の化学はガッカリするほど面白くなかったが、あれは教科書と（つまらない）先生のせいだと今でも思っている。数学の塚本清之助先生は東大工学部卒業後、海軍工廠に入り、酸素魚雷の開発のためにドイツに留学された。先生の立ち居振る舞いのスマートさと授業の面白さは、多感な私に「格好良い人物」のイメージを植えつけた。将来ポリマーをやろうと京大工学部高分子化学科を受験するつもりでいたが、簡単な分子を際限無く繋げていくのはそれほど面白い化学ではないのではないか、と迷った時期があった。丁度その頃、毎週親父に絵を習いに来ていた名大農学部農薬化学研究室教授の宗像桂先生にどんな研

究をされているのか尋ねてみたところ、既に酔っ払っていた先生はメスの害虫が発散する化合物によって遠方からオスが飛んでくるというフェロモンの話をして下さった。「ポリマーよりこっちの化学の方が面白い！」と直感した私はその場で宗像先生の弟子になりたいと宣言し、名大農学部に行くことにした。そして学部3年の年末頃だったと思うが、学生実験室で実験していたところ、生物有機化学研究室助教授の岸義人先生が私の前に現れた。いわゆる一本釣り、私が先生のグループの一員になればバラ色の将来が待っている、というような感じで勧誘された。そんなことよりも、こんな自信満々な人を今まで見たことがないという強烈な印象と、岸先生の何とも言えない人間的魅力に引きずり込まれた、というのが正直なところである。これが我が人生最大のターニングポイントとなった瞬間だった。学部4年で研究室配属された頃に岸先生から言われたことで今でもよく覚えているのは、「化学が本当に面白いと感じるようになるには10年かかった」と「論文に書かれていることをそのまま信用するな」ということで、岸先生ですらそんなに時間がかかったのだから、辛抱強く努力すれば自分でもそのうち面白いと感じられるようになるだろう、と余裕が持てたように思う。家から大学に通うのに片道1時間10分かかったので、月水金と研究室の倉庫に寝袋で泊まるようになった。フグ毒テトロドトキシンの全合成チームに投入され、夜12時に帰宅するのが日課の岸先生に指示された実験をやることで何度夜明けを迎えたことか。日曜は昼まで眠ることが何よりの楽しみという生活だったが、強制労働させられていると思ったことは一度もなかった。私のような駆け出しの学生にも世界最先端の研究を行っているのだと信じ込ませる魔術師だったのかも。修士2年の夏に岸先生がハーバード大学化学科の客員教授として渡米することになり、私もお供として1年間留学することになった。初めて日本を離れ、日本が如何にちっぽけな国であるか、そしてアメリカがとてもでっかい国であるかを若いときに実感できたのは幸いだった。当時のハーバード大学は有機化学分野では世界最高峰であり、同じ階にノーベル賞受賞者が2名居られたことも大きな刺激となった。後年ノーベル化学賞を受賞された Corey 教授による有機合成化学の講義は非常に論理的で勉強になったが、他の有名教授たちの講義も新鮮で、もっともっと勉強しなければという強い思いに駆り立てられた。2年後の1974年に岸先生が37歳の若さでハーバード大学の教授に就任されたので、私も院生として再渡米し研究を続けた。後に有名な教授になった何人かの院生が講義中に発したレベルの高い質問に、

「何で彼らはこんな事まで知っているんだろう」と驚嘆すると同時に、「負けてたまるか!」という競争心が湧いたものである。今になって、優秀な同世代の若者たちに巡り会えた好運を噛みしめている。研究面では、経験も積み、知識も増えてくると、指導教授の考えとは別に、自分のアイデアを何とか実現させようと「闇実験」をちょくちょくやるようになった。先生との真剣勝負という心構えで、将来独立した研究者となるための準備を強く意識していたのは事実である。(先生からの)自由は与えられるものではなく勝ち取るものであり、どんなに厳しい環境の下でも自分を成長させるための努力を惜しんではならない。とにかく一心不乱に頑張った結果、博士論文の中核であるグリオトキシンの全合成に成功し、博士口述試験の日を迎えることが出来た。当日は岸先生のオフィスで Corey 教授と、あと2年半長生きされていたら2度目のノーベル賞を受賞されていたという Woodward 教授による審査が行われた。質問されては黒板を使って自分の考えを述べるという、額に汗する?試験が2時間続いたが、今でも忘れられない貴重な体験であった。

1978年に米国ライス大学の化学科に助教授として赴任してから17年間研究教育に従事し、1995年に東大薬学部教授として帰国したが、私の研究者としての基礎は名古屋大学とハーバード大学で形成されたといっても過言ではない。その後の研究成果は、常に自分の頭を使って「ユニークな全合成や反応開発」になるように心がけたことと、純真で気持ちの良い学生達の弛まぬ努力と研究室スタッフの向上心の賜物であり、また時には思いがけない幸運にも恵まれたということである。2年前に名古屋大学の創薬科学研究科に籍を移して研究を続行しているが、物忘れが酷くなったものの、まだまだ(ろくでもない)アイデアが浮かんでくるということは、人間そんなに簡単には無用の長物にはならないようだ。若い方々も、人との出会いを大切に、今生きているこの瞬間瞬間に最大限の努力を注ぎ続ければ、息長く研究を楽しんでいけるのではないかと思う。